東京帝大の火災の實驗

八月二十五日東京帝大グランドで寫眞に示す樣な火災の實驗が行はれた。實驗に供された建物は元前田侯の長屋二軒で、グラウンドの中央に約3米の間隔で建てられ、木造建の二戸の中には普通の家屋と何一つ變りない樣に、夜具、蒲團、疊、古雜誌、ボロ綿等を入れ、之を燒いて火災の溫度、同繼續時間、燃燒標準、燃燒物の耐火溫度等を測定し、更に風の起る具合、輻射熱の測定を行つた。

先づ午後一時一戸の右端の襖に帝大工學部の内田教授がローソクで點火すれば、20秒にして濛々たる煙に包まれ紅蓮の焰がメラメラとあがり、5分で窓ガラスに赤々と焰が閻つて出る。13分で瓦屋根が落ち、20分の後には完全に隣接の家屋に火が移つた。

二戸の家屋の内部には床から2米の處や天井、押入などに20個の溫度計と金屬製のサーモカツプルが備へられ、家の周圍に間隔を置いて備へられた10個の風測計と8個の輻射熱測定のラヂオメーターの線と共にグラウンド一隅のテントに誘導され、これが燃えて行く過程につれて刻々數字となつて記錄されて行つた。

この實驗は二度目であるが、この貴重な結果は凡て一ヶ月位かゝつて算出され、日本建築物の上に大きなアドヴアイスがもたらされる譯である。

上の寫眞は點火直前の景で、右端にあるのが測定記錄係のテント。下は盛んに火煙を上げてゐる實驗のクライマツクス、白く立つてゐるのはラヂオメーター。ともに同日本誌寫眞部の撮影である。尙結果の詳細は追つて發表したいと思ふ。